

## 『帰還兵はなぜ自殺するのか』

2015年06月23日

自衛隊が給油支援のためインド洋沖とイラクのサマワに派遣された。これらの地域は砲弾が飛び交う戦場ではなく、テロもなく、一人の戦死者も出していない。ところが、帰国した自衛隊員は、昨年度末の時点で54人が自殺している。自殺者の心理状態は複雑で、単純に評することはできないが、国民平均の10倍以上の率である。自衛隊員を襲った強度の恐怖感がPTSD（心的外傷後ストレス障害）を引き起こしたことは間違いない。

アフガニスタン・イラク戦争に関わった帰還米兵200万人のうち、50万人（25%）がなんらかの精神的障害を持ち続けている。PTSDと外部から強烈な衝撃を受けた脳が頭蓋の内側とぶつかって起こすTBI（外傷性脳損傷）によって苦しんでいる。そして、アルコール、薬物依存症が多発し、レイプ、殺人事件などの犯罪が拡大している。自殺者は毎年250人を下らない。自殺を企てた者は、その10倍を超えていると言われている。銃撃やテロによる戦死者より、自殺者の方が多くなっている。彼らを抱える家族の苦しみは大変なものである。米政府は彼らへのカウンセリングや投薬治療をしているが、とても解決できる状況ではない。もちろん、精神的なトラウマだけでなく、手足を奪われ、目や耳に障害を負った兵士たちもいる。彼らは生涯、障害者として生きざるを得ない。

この状況をどう見るか。誤解を恐れずに言えば、良いことで「希望」であると見なすことができるという人もいる。大義なき戦争の報いを受けるべきだと言いたいのではない。人は殺し合う戦争の現場に身を晒せば、心は癒されない傷を負う。この傷こそが人間であることの「証」であり、戦争を止める一種の「希望」であるという訳である。

理解できなくもないが、傷ついた帰還兵たちと周りの人々の惨状は目を覆う。デイヴィッド・フィンケルの『帰還兵はなぜ自殺するのか』は、帰還兵たちと妻子や身内、更にペンタゴンの上層部や医療関係者たちにインタビューをした丁寧なレポートである。フィンケルは「ワシントン・ポスト」で23年間、記者として働き、イラク戦争に従軍した兵士たち取材するためバグダッドに赴いた。そして、死と隣り合わせの戦闘をしている兵士たちを『The Good Soldiers（良い兵士たち）』でレポートした。その後、バグダッドで知り合った帰還兵たちから電話やメールや手紙が来て、精神的なダメージを受けた苦悩を訴えられた。そこで、インタビューをして、上記の本を上梓した。原書のタイトルは『Thank you for your service』で、苦悩を負った兵士たちに慰労と感謝を込めて『兵役奉仕に感謝する』という思いで書いたらしい。感傷を排し、三人称で淡々と客観的に著している。著者自身が「付記」で「本書は、ノンフィクション・ジャーナリズムの作品である」と記している。しかし、帰還兵たちの現実には、爆弾破裂による後遺症と、戦友を失い、敵兵を殺した精神的打撃によって、悪夢、怒り、鬱、不眠に襲われ、薬物、アルコールに依存し、自傷行為や犯罪に走り、自殺を考えるようになる。そして、自責の念と戦争の恐怖は消えることがない。5人の兵士とその家族の証言が中心になっているが、妻たちは「戦争に行く前はいい人だったのに、帰還後は別人になった」と言う。戦場は家庭生活をできなくなるほど、人を変えてしまう。この事実から戦争を止める手立てを見出せるのか。

米国は、このようなりポートを出版できる。だからであろうか、オバマ大統領は戦闘指導将校を少数送り出し、兵士たちの犠牲を抑えるため、空爆（無人機）に力点を置いている。アフガニスタン、イラク、現在のシリアで戦闘に巻き込まれている人々の苦悩はいかばかりであろうか。殊に、幼い子どもたちの精神的傷の大きさを想像する。